

# イザベラ・バードの歩いた道 — 旅の終着地 沙流川流域「平取」 —



The Destination of Isabella L Bird's Adventures Travel  
in Ezo Saru River Basin

ひらむらてつろう  
**平村徹郎\***

HIRAMURA Tetsuro

## 1. イザベラ・バードとは

イザベラ・バード (Isabella Lucy Bird, 1831-1904 (天保2-明治37)年)は、19世紀の大英帝国の旅行家、探検家、紀行作家、写真家、ナチュラリストとして一般に知られています。

ヨークシャーの牧師の長女として生まれ、両親は病弱だった彼女に旅行家としての力を身につけさせ、旅を通じて生きてゆけるようにする教育を熱心に施しました。このため、旅行家としての能力を育まれたバードは、22歳から69歳まで半世紀近くにわたり南米を除く全大陸を旅し、その成果を72歳で亡くなる晩年まで、膨大な著作や講演などで世界に伝えました。

当時、女性会員を認めていなかった英国王立地理学協会が1893年、彼女を特別会員として選出したことも、旅行家としての高い評価の表れで、世界の旅行史の頂点に立つ人物と称されています。

1878 (明治11)年 (145年前)、開港後間もない江戸 (横浜港) に降り立ち、明治維新のさなかの日本に7か月滞在したバードの旅の大きな目的地は沙流川流域、平取でした。

帰国後の1880年、“Unbeaten Tracks in Japan”にまとめた著述は、1973年に高梨健吉訳『日本奥地紀行』として翻訳され、長らく定着し人気を博しました。一方、バードやその旅の解釈において、いくつもの誤解が指摘されました。(翻訳の誤りのほか、当時の社会背景、アイヌ文化などの情報の誤りなどで、バードが本来記した意味や背景と異なっているとの指摘がありました)

その後も数多くバードに関する著述が発行されるなか、バードの研究において第一人者として知られる金坂清則京都大学名誉教授は、「旅と旅行記を科学する」という地理学者の立場から、「旅行記を読むとは、そのもとになった旅を読み、旅する人を読み、旅した場所・地域を読み、旅

した時代を読むことである」として、2013年に『完訳 日本奥地紀行』<sup>1)</sup>を刊行し、精力的に研究を続け、現在もバードに関する新たな事実を解明しています。

ここでは『完訳 日本奥地紀行』(金坂訳)と金坂氏の著述に基づき、北海道での旅、特に旅の終着地、沙流川流域でのバードの足跡を辿る活動について報告します。

## 2. 「イザベラ・バードの道を辿る会」とは

イザベラ・バードの道を辿る会(「バードの会」)は、北海道環境財団理事長で元北海道大学植物園園長の(故)辻井達一先生の呼びかけに、バードに関心ある人たちが集まり2007年に発足しました。

北海道でのバードの足跡を辿ることを主眼とし、地域の歴史や風景の移り変わりを見つめ、環境保全と観光の両立を図りながらエコ・ツアー、フットパスによる地域の振興を目指してきました。

七飯、室蘭、白老、札幌、平取に部会があり、各地で活動を行っています。「バードの会」の活動と成果を以下にまとめます。

### (1) ルートの復元と解説板の設置

函館から平取までバードが歩いた道(ルート)を復元するため、明治期から現在までの地形図を地理情報システム(GIS)で重ね合わせ、バードが歩いたと思われる道を明らかにしました。

これはのちに「バードの会」会長となった、金子正美酪農学園大学教授(当時)の指導学生によるGISデータ化が、後述の各媒体での応用を可能としました。また、復元した



〈写真—1〉終着地 義經神社の解説板  
(お披露目式2011年)

\*イザベラ・バードの道を辿る会 事務局長  
Secretary-General of Trailing Isabella Bird Association

ルートをもとに周辺の自然環境や歴史・文化などの地域資源の発掘を行い、バードにゆかりの地、計6か所（七飯、森、白老、日高町富川、平取2基）にバードの足跡を伝える解説板を設置しています。

## （2）フットパスの整備と各種媒体による情報発信

白老、および沙流川流域ではフットパスを整備しました。『沙流川流域編』（佐瑠太（日高町富川）から義経神社（平取町本町））では、民間企業CSRの助成を受け、区間に全28基のサイン（道しるべ）を設置し、コース整備を行い、エコ・ツアーなどで活用しています。



〈写真一2〉サイン設置（伊藤園助成）とツアー紫雲古津解説板

また『沙流川流域編』では、リーフレットとマップ（紙媒体）を作成し、観光拠点に備えたほか、「バードの会」ホームページ<sup>2)</sup>で無料ダウンロードが可能となるよう情報発信を強めました。

さらに紙媒体から、GISデータを活用してウェブ上で、ルートやバードの情報を閲覧できる「ストーリーマップ」<sup>3)</sup>へと進化させました。



〈写真一3〉フットパスマップ・解説リーフレット

ストーリーマップはスマートフォン等を携帯することで、現地を踏査しながらルート上の現在位置を明示し、その付近でのバードに関する情報を得られる仕組みで、ガイドなしでもフットパスを楽しむことができます。

また現地に赴かなくともPC上でルートを追体験できるとして評価を得ています。

## （3）シンポジウム等の開催

フォーラム「イザベラ・バードを道しるべとする地域づくりとは」（函館）、室蘭市「港の文学館」でのパネル展、2018年にはイザベラ・バード来道140周年を記念するシンポジウム「写真でたどるバードの道」（平取）をそれぞれ主催してきました。



〈写真一4〉シンポジウム パネルディスカッション

バードにゆかりの拠点をシンポジウムなどのイベントで結び、バードとその功績を発信するとともに、ツーリズムなどへの応用を模索してきました。（シーニックバイウェイ北海道、胆振・日高への流入人口の拡大を目指す【nittan】など）

また、北海道新幹線や、白老での象徴空間国立博物館ウポポイ開業などのシナジーを活かして、バードの足跡とともに「点を線につなぐ」ことで、交流人口拡大と地域活性化に寄与すること、また教育の場での活用により、地域の歴史・文化・自然へのこれまでと違った観点からのアプローチとなることを目指してきました。

## 3. バードの北海道の旅とその目的

2021年9月には、平取町主催の文化大学講師として、バード研究の第一人者である金坂清則氏をお招きし、旅の終着地である平取での現地調査に帯同し、研究の成果の一端を、直接聞かせていただく機会を得ました。

金坂氏はバードの北海道の旅の目的として大きく次のようにまとめています。

1. アイヌとその社会・文化の特質を明らかにすること
2. キリスト教布教、伝道の実相を学び知るために函館を訪れること
3. 本州とは異なる北海道の美しい自然や風景を臨場感あふれる筆致で、騎乗や樽前山の登攀という冒険とも絡ませ明示し、北海道の魅力ある姿を伝えること

（北海道マガジン「カイ」（Webマガジン）<sup>4)</sup>での集中連載より）

金坂氏は、上記1と2の目的はつながりがあり、アイヌ伝道と無関係ではないが、しかしそれだけではなかった、としています。

目にするあらゆるものに関心と愛着を抱き、それを鋭い観察眼で捉え素直に書きとどめる旅人としての特質を十二

分に発揮し、かつ和人のそれとはまったく異質なアイヌの社会・文化・伝統・価値観・宗教・言語を記録に留めることが目的であった、としています。

さらに金坂氏の研究によれば、平取に滞在した4日間は7か月に及ぶ日本滞在期間のわずか0.5%であったのに対し、平取での調査に関する記述は原著全体の8.4%におよぶ分量であるとし、前記目的の証左であるとしています。

#### 4. 2つの異なる文明を記録にとどめる

『完訳 日本奥地紀行3、P.21』において「蝦夷は公式には北海道という」と記しながらも、以後の記述をほぼ「蝦夷 (Ezo)」とし、北海道・アイヌの世界と、和人文化 (実際には関西・伊勢神宮を周遊していることから) の二つの文化を対比する意味合いで記述を進めたものと思われる。

産業革命後の英国人 (西洋の価値観) の視点で、ある意味の混乱にある明治維新のさなかの日本を記録し、さらにその日本の北方に、同じ日本とはひとくくりにはできない文明を持った民族がおり、日本政府との対峙において、ゆるやかに消え去りつつある文明として、捉えていました。

西洋の視点でみた二つの日本を、誤解や今日的観点からすると差別的な要素こそあれ、繊細かつ躍動的に、目に映るありのままを好意的に、熱量をもって記しているものだと思います。

それは価値観の対立と融合を克明に記した、ということとも考えられます。

先行きが不透明で、いくつかの価値観があふれ、そして対峙・衝突し、明確な解決を得ない混迷している状況はひょっとして現代にも通ずるかもしれず、こうした様子をバードは両者のいずれでもない独立した視点で、克明に記していた、ということなのだと思います。

#### 5. 「平取」での調査

平取滞在中は、沙流川をおそらくは二風谷までチブという丸木舟で上流へ遡ったり (金坂氏研究)、何人もの病人の命を救ったおかげで義経神社にも案内してもらった、と記しています。

このエピソードは、バードが平取でアイヌの人たちとの距離を積極的に縮め調査したことの表れで、本来、自分たちにとって神聖な社 (しかも神道の社) へ、なおかつ外国人を案内した、という事実には幾重にも驚きがあります。

日本中世の英雄、源義経を御神像 (近藤重蔵が寄進したとされる) とする神道の社を平取の長ペンリウクが治めていた、というエピソードからも、沙流川流域のアイヌが、アイヌ文化の中にもとからある、調和や融合といった多様

性の中に生きていた、とともらえることができます。

バードの旅はこうした背景についても現代を生きる私たちに気づかせてくれます。

#### 6. 旅の行程から気づくこと

バードの日本・北海道の旅は、英国公使パークスが企画・立案し、バードがそれに応え使命感に燃え実現したものだと言っています。

パークスは北海道の旅の行程を最優先して決めた、つまり日程的にあとにも先にもずらすことのできない日程を定めたものだ、ということです。

北海道の旅が重視されていたことの証であると金坂氏は言います。それはバードの次の記述にヒントがあります。

- ・ 8/21往路の白老で寒くて眠れなかった
- ・ 8/24平取ではひどい寒さが身に堪えた、(略) 翌朝の夜明けにひどい寒さで目覚め…
- ・ 8/29復路の白老でも激しく打ち寄せる波の音とひどい寒さのために疲れ切って…

北海道に渡るまでの2か月間は梅雨時期の旅路に悩まされるものの、北海道では秋に差し掛かると寒さがバードの調査を阻むことを予想し、絶妙なタイミングを計ったとの推論です。

145年前のこととはいえ、8月の下旬に「紅葉」を示す記載や (平取では植物に関する記述は少ないが)、衣類や住居環境が現在とは異なるのは当然のこととして、8月下旬で寒さ (秋の気候) に備えたという事実に気づきます。

つまり北海道・沙流川流域の気候は今よりも冷涼であった事がうかがえるのも興味深い事実です。

#### 7. 旅の終着地「平取」 今後どう活かすか

##### (1) 新しい事実が明らかとなる

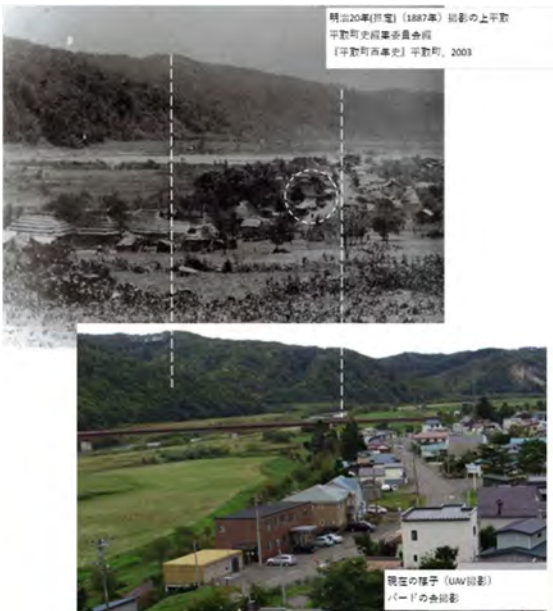
旅の終着地、平取でのバードの調査滞在中は3泊4日であったと金坂氏は断定しています。

バードが3泊4日の平取滞在中は、平取コタンの長であるペンリウク宅に逗留しています。

金坂氏の研究では、現在の義経神社参道付近の通りを挟んだ位置、との推定がなされています。(〈写真—5〉の○印のチセ)

北海道マガジン「カイ」集中連載でもこの推論について触れていますが、明治期に撮影された平取 (ピラウトル・コタン) の複数の写真と対比し、明治29年製版の五万分の一地形図や近代の地籍図から、チセの位置を特定する手法です。

2021年「バードの会」では金坂氏の来町に先立ち、現在の様子をUAVにより事前撮影し、金坂氏の平取調査時に



〈写真—5〉1887年撮影写真と現在バードの会撮影写真

提示して意見交換しました。

このようにバードの滞在したペンリウクのチセの位置が、現在でも特定できることがわかります。

史料を深く掘り下げることで、新たな事実が解明されることの手掛かりとなる事例でした。

## （2）アドベンチャー・トラベルATの舞台として

「アドベンチャー・トラベル（AT）」とは、アクティビティを通じて自然体験や異文化体験を行い、地域の人々と双方向で触れ合い楽しみながら、その土地の自然と文化をより深く知ることで自分の内面が変わっていくような旅行形態を指します。

サステナビリティや旅行を通じた地域貢献を重要視する層から支持され、主にヨーロッパや北米、オーストラリアを中心とした富裕層に人気が高まっています。

ATのプレッシャーとして、2022年平取において、「バードの会」と平取町アイヌ文化振興公社が海外の旅行関係者を受け入れました。〈写真—6、7〉

まさにバードの旅はATの最たるものであった、逆にいうとATとはバードの旅を現代に還元しようという取り組みのようにも思えます。

ATはバードの道や地域の文化を活かす今後の重要な活路であると考えています。

2023年ATツアー本番が告知され、北海道での全15ツアーのうち、沙流川流域を含む「日高」ツアー



〈写真—6〉AT北海道プレッシャー「バードの会」撮影



〈写真—7〉平取町アイヌ文化振興公社提供

ーは一番人気で完売した、とのことでした。

余談になりますが、2018年11月、女優のシャーロット・ケイト・フォックスさんが来町されました。（NHK朝の連続テレビ小説「マッサン」でヒロインを演じた女優）

翌年（2019年1月）に放送される番組「シャーロットの北海道紀行！～イザベラ・バードの道～」のロケでの来町で、「バードの会」柳秀雄さんがガイドとして同行・共演しました。

最終カットの撮影のため、旅の終着地ペンリウクのチセ付近（＝フットパスのゴール、〈写真—6〉）の風景を眺めた際、アクシデントが起きました。

カメラのまわっていないところで、シャーロットさんが突如、涙を流したのです。

演出ではなく、感傷的な気持ちになり涙してしまった、と語ったそうです。

145年前にバードが外国人女性としてひとり荒涼たる旅路の末に見た風景を、シャーロットさんも眺めることで、バードとご自身の人生を重ね合わせ、感慨に耽ったのかもしれない。

バードは「平取がある山間の谷間はこよなく美しかった」と記述しています。

情感を呼び起こす、そうした力のある風景なのかもしれない、として「バードの会」では様々なエピソードとともに今後の活動に活かしたいと考えています。

### 【脚注・引用文献】

- 1) 完訳 日本奥地紀行1～4（2011～2013）金坂清則  
本報告では、3「北海道・アイヌの世界」を中心に引用しています。
- 2) イザベラ・バードの道を辿る会HP  
<https://isabellabird-hokkaido.sdgs.asia/>  
MAPダウンロード<https://isabellabird-hokkaido.sdgs.asia/archives/reports/02-2>
- 3) ストーリーマップ 沙流川流域編  
<https://isabellabird-hokkaido.sdgs.asia/archives/reports/02-2>
- 4) 北海道マガジン「カイ」  
【短期集中連載】イザベラ・バードはなぜ平取を目指したのか 金坂清則（2020）  
[https://kai-hokkaido.com/feature\\_vol46\\_bird1/](https://kai-hokkaido.com/feature_vol46_bird1/)